

## 田士英・朝永律朗の句碑

寺井 房夫

## 建立経過報告

先日、長崎歴史文化協会に出かけた時、越中先生より阿野露團氏が「ながさきの空」二九九号に投稿された「師弟愛のシンボルとして：朝永律朗句碑建立記」を戴き、越中先生より「あなたも当時の思い出があったら、お書きになりませんか」と言われた。

平成二年一月、当時・私は小島小学校校長として勤務していた時期であった。三月小島小学校創立記念日の記念行事として私は小島地区の長老一ノ瀬弥一氏に何か地区に関する御話をとお願ひしたところ、それではというので講演を引きうけられた。「校歌のふる里」と題して小学校校歌の作者田中英二先生のお話があった。この一ノ瀬氏のお話が今回の「田士英・朝永律朗句碑」建立の発端になった事を私はいま思いだしている。

田中英二先生は明治二十九年一月から昭和六年まで学校教育に精勤された方で「長崎大百科事典」にも記載されてあられる長崎の文化に功労のあられた方で、其の最後の勤務地が小島小学校であり、其の時教えを



小島小学校長時代の田士英 (田中寛子女史提供)

うけられた一人が朝永律朗さんであった。長崎大百科事典には田中先生の事を次のように記してあった。

明治八年長崎に生る。本名、田中英二。俳号・田士英。明治三十五年結成された俳句結社「半夜会」を経て、明治四十三年長崎に来遊した河東碧梧桐の指導をうけ碧派新傾向の「伽俱津知会」を創立。大正四年長崎に於ける俳壇最初の選集「句集ナガサキ」を編纂。大正十年高浜虚子の長崎来遊を機に定型俳句に復帰。長崎の文人田中彦影・石橋忍月・中西

木造校舎最後の卒業生が残した「卒業記念の碑」に「さよなら木造校舎」の文字を刻み加えた新しい碑の建立を私が企画したところ、皆様の賛同があり「新校舎落成の碑」として建立して戴いた。この時、私は小島小学校にも「田士英・律朗両師の碑」を建てたいと深く考えた。

小島小学校の直ぐ下には田上溪谷より流れ下る小島川があり、其の谷間には長崎名勝の一つ「白糸の滝」があり、続いて薩摩藩の小島別邸跡、小島百花園、茂木街道、ピントク坂などと旧跡が多く、昔の人達はこのあたりを「小桃園」と呼んでいたので小島P.T.A.の機関紙も「小桃園」と名づけられたそうである。このような風雅な地であったので田士英・律朗の両師も育たれたのではないだろうか。

平成十七年十一月十四日、阿野露團氏を発起人代表として朝永律・寺井房夫の兩人を中心に建碑助成申込書を長崎市に提出、市より碑に対する公租公課問題を告げられ計画は一時中断。次いで地区のミリオンプランとして銀行投資信託等を利用して再発足。平成十七年十一月十八日地域紙に「小島の師弟 田士英・律朗」を発表。小島小学校塚本俊朗校長よりも強力なる御援助を戴く。次に小島地区ふれあいセンターよりも援助される旨の連絡をうけられた由連絡あり。

平成十八年春、塚本校長より連絡あり。「小島小にはチャボがいます、あのチャボは何時ごろから、学校にいますのですか。P.T.A.の方にも記念碑建立に就いては非常に厚意を持たれたいに御援助を戴いておりませう。」との事。早速チャボの件につき回答、「あのチャボは鷹島うまれです。小桃園の小島小には、いかにも合った鳥でしょう。」とお答えした。何んだか春めいた感を深くしました。

平成十九年一月十五日 小島小前校長伊東賢悟氏、現塚本校長も大いに記念碑建立には熱意を示され、ついに句碑建立決定の知らせを受けた。そして同年五月一日火曜日除幕式があった。

田士英の「散る花」の句碑にそって、律朗の「落花しばらく」の句碑がそえられ、小桃源に育った二俳人の新たな功績を見い出すことになった。長崎の文芸を代表する結社「太白」の創刊に尽力された田士英、その編集に尽力された律朗のお二人の句碑が肩を並べる姿で「師弟愛の深いつながり」を小島小学校から発信された事に私は深く感激している。(師弟の愛をささえる会)

朱人が設立した「あざみ会」に参加、昭和四年同人と共に「太白」を発刊。以来「鎮西俳壇の白眉」と称された。昭和十八年没。

其の年の五月十四日刊の「小島小学校だより」に前記一ノ瀬氏の御話の骨子を私達は集録した。其の文の中に田中先生より俳句の指導をうけた愛弟子として朝永律朗氏の事も紹介した。

私は若い頃、磨屋小学校に勤務していた時、保護者の一人で西古川町に居住しておられた「田中さん」の家を訪問する事があった。なんと、その「田中さん」とは私の先輩で長崎教育委員会主事の田中英吉先生であったのには驚いた。更に、英吉先生が田中田士英の御長男で私のクラスの子ともさんはお孫さんであるとお聞きして更に驚いた。

西古川町のお住いは今も其のお孫さん達が住んでおられる。そして家の前には田士英が植えられた一本の椿が残っている。たしか其の時私は田士英の短冊を見せて戴いた。その句を今でもおぼえている。

勝風を下す 広言ぼさきつ

平成三年三月 私は定年により小島小学校長を退職したが、此の時のP.T.A会報「小桃源」に「句碑のある学校」という一文を残した。今考えると、此の一文を記した事が私にとっては今回建立された「師弟愛の碑」建立の原点になったのではないかと考えている。「小桃源」に私は次のような文を残していた。

本校(小島小学校)には校歌の作詞者であり、明治二十九年一月から昭和六年三月までの三十六年勤務された田中英二先生(註・田士英)が本校を退く日の感激を込めて詠まれた句が、句碑として朝永律朗氏の尽力によつて校門の横に建立されている。其の句は  
散る花を 手にうけて 思ふ事多し田士英

平成十六年、私は滑石小学校で同校が昭和四十八年新校舎に移転した当時、それまで旧校庭内にあった「卒業記念樹碑」を改修する事と、旧

### 風信

○二月には鯨の事を書きたかった。それは故小方定一翁の「長崎料理の自慢話」節分の條に次のように鯨の事が記してあったからである。節分、豆まきがすんだら一室に集り盃事はじまる。ご馳走は、鬼の手こぼしと言う赤大根のお鱈(赤大根は輪切にして塩で食す)、作身は鯨(鯨の百尋、金頭の煮付、とうぼイカの煮付、鯨のゆでももの、からし菜・人蔘・こんにやく等の辛し合え。煮め。今夜は何んでも大きなものを食べるのです。

○然し、二月はどうした事か私に各方面より多くの本が贈られてきたので其の本の紹介をせねばならず「鯨話」は次の機会にする事にした。唯一つ私には鯨について話しておきたい事がある。それは昔の鯨漁場跡の遺跡を訪ねると、其処には必ず「鯨児供養」と刻まれた小さな供養碑が建てられていたのが、今でも私の記憶の中に何故か強い印象として残っている。

○さて、寄贈本の第一は十八銀行前頭取藤原和人氏自著の「詫び状からの出発」であった。この不思議な本の題名の由来については巻頭の「お客様へのご連絡」に先ず書かれていた。著書の中で私は「パリイ時代」の項に心がなごんだ。

○次に二十六聖人の結城了悟神父より「キリシタン時代からの声」を戴いた。内容は外国文献を多く引かれ、今まで不明確であった史実について強く一歩ふみ出しておられる。例えば「長崎最後のキリシタン乙名」「出島の誕生」等々である。(長崎純心大博物館編輯)

○清島和枝女史よりは自著の県下キリスト教布教当時の佛寺変遷史の論考「長崎における宗教政策に関する研究」。女史がここ五年間・京都竜谷大学に学ばれた研究成果をまとめられたもので立派な論考だった。

○長崎歴史文化博物館の原田博二研究所長より原田先生の指導で同館の近世文書研究会の人々が協力編集された「天保六年長崎奉行所関係史料」で内容は実に充実していた。

○最後に本会でも「ながさきの空 平成十九年度特集号」を十八銀行の御援助で発刊、内容は各分野にわたつており一読される事をお勧めしたい。(無料・希望者は本会事務局まで)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二一 一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 二F

